



3月11日後の事ども

牧師 中原真澄

人の認識というものは結局、自分の個人的体験の枠によって決まってしまう、その外に広げていくことは、ただに「情報」を得るだけでは難しい・・・そんなことを感じたり、考えたりしています。ここ数ヶ月の様々な出会いと働きと、そこで触発された事どもを忘れないようにと、一つの備忘録的に記したいと思います。

3月11日のあの瞬間を思い起すと、牧師館リビングのソファに座って新聞を読んでいた私は「震度4かな・・・。5にいくかな・・・。それにしても、長いなあ～～」とソファの上でジローを落ち着かせていたことを思い出します。震源地はどの程度の揺れか・・・とテレビをつけると、国会中継場面が映ったと思った瞬間、真っ黒になりました。やがて揺れが収まり、牧師館は何ともなかった(テレビの上のダルマの置物さえ落ちなかった)ので、会堂の様子を見に行きますと、これまた普段と全く変わらない。「大したことなくて良かった」とラヂオをつけると、津波警報がやがて大津波警報に変わり、そのうち、仙台沿岸部は可成りの被害が出ているらしい・・・そんなニュースが伝わってきました。岩手沿岸部もタイヘンだろうな・・・と思いつつ、夕刻、雪が舞い出した中にジローと散歩に出ると、信号が全て止まり、ノロノロ渋滞する車で道路が溢れている・・・！これは余程ヒドイかも知れないと、漸く思い至りました。

翌朝、盛岡でも避難所が設けられ、給水車が出ている・・・そうニュースで聞き、これはタイヘン・・・と、先ず、佐藤倫子さんのお宅へ(安否確認に出かけたのが翌朝・・・認識の甘さがどれ程だったか、お分かりでしょう！)。昨夜から知人が一緒に泊まってくれている・・・と、お元気そうな様子で一安心。近くのマンション7階に鶴丹谷さん(バプテスト教会員・朝樗会のお仲間)宅を経由して、中条先生宅へ。固定電話に出ない(停電時の設定変更をしてなかった)ので、近くの小学校に避難されてるのか・・・と心配したのですが、ご在宅。断水で、暖房もないということで、牧師館へお誘いする。

午後、パンなどを買いにスーパーへ。長い列で待つ間に店に電気がつき、2時間がかりの買い物を済

ませて牧師館に帰ると、こちらも通電。テレビを点けると、あの恐ろしい情景が目飛び込んできました。想像を超える震災であったことに漸く気づいたのです。皆さんも同様だったかも知れませんが、まして、自分の家に何の被害もなかった私には、初めから想像の広がりを持ちようがなかったのだろうと思います。

翌週の火曜(15日)、濱塚さんが来訪。盛岡YMCAの若いスタッフが「こんな状況で何もしないのでは、YMCAじゃない」と言っているが、少ないスタッフで日常プログラムをこなしている盛岡YMCAには余裕がない。どうしたらイイか・・・という相談でした。「それはYMCAとして当然な思いだよ。いいよ、やっちゃったらイイ」というのが私の考えでした。「やってしまえば、日本のYMCAが、世界のYMCAも、ほってはおかないよ。大丈夫、必ず支援してくれるから」。直ぐに、何処が協力先として考えられるか相談しました。その結果はご存知のとおりです。濱塚さんは直ぐに動いて宮古教会に赴き、森分牧師の全面的な協力を得つつ18日スタート。今に至るまで全国の支援を得て継続しています。

私個人は、もう若くないから・・・と自重していましたが、そんな思いとは別に、東京の友人たちが動き始めました。連絡がつくようになって直ぐメールをくれた東京YMCA時代のボランティアで青山学院高等部同窓会の会長をしている友人や、東京で牧会していた時代の友人・蒲田教会の林牧師から連絡と共に物資も送られ、私のメールを見た王子教会の大久保牧師からも支援物資が送られてきました。やがて宮古で自転車がある・・・という情報をYMCAから得、応えたのが青山学院高等部同窓会でした。30台以上の自転車を集め(中には、70代のOGが杉並の自宅から青山まで御自分で漕いできた自転車を置いていって下さったり!),トラック2台で届けてくれました。牧師館はそういう時の中継地点として、大いに活躍しました。また、やがて届いた段ボール箱100箱以上は、会堂の和室が倉庫がわりに、これまた大いに活用されました。他に支援物資を送って下さったのは、昨年暮れと7月に教会を訪

ねてきてくれた佐藤神学生が会員である番町教会から、今も届いています。これらは、教区の他、千葉さん、県社協等を通し、5月以降は私が被災地に直接に届けることもあり、大いに役立つことが出来たと感謝しています。

奥羽教区の動きは、ガソリン不足もあって、当初、鈍かったと言ってよいでしょう。3月28日、延期された地区(教師)会が持たれ、沿岸被災教会に牧師仲間として支援・協力することが決議されました。4月16日、大船渡教会・村谷牧師就任式に出席した際、初めて被災地の酷い状況を目にしました。普段どおりの景色が、ある地点から突然、荒涼とした光景に一変する様は、世界を鋭い刃物で切断して異次元世界に接ぎ木したような、そんな感覚で目に映りました。そこに暮らしていた人々を思うと、とてもレンズを向けることは出来ませんでした。18日、支援活動の一環として新生釜石教会に赴き、柳谷牧師とは短く歓談しただけでしたが、被害を受けた教会が癒しと回復へ向けて歩み出している姿を目撃でき、ある種の感銘を受けて辞しました。

5月からは、遠野教会の三浦牧師に誘われ、新生釜石教会や大船渡教会を訪れる他、沿岸部で被災した幼稚園、保育園をお訪ねして状況を伺い、その支援を図ることが多くなりました。遊具を全て流された幼稚園・保育園の要望を聞き、ブロックや三輪車、さらにプール等を、青山学院高等部同窓会の助力を得て購入、届ける働きをしました。9日には初めて大槌に行き、その余りの情景に胸が潰れる思いでした。津波で壊され、更に火で焼き尽くされ、黙示録的とも言える光景の中で、ここが祝田さんの家があった筈・・という所を探し出し、奈緒子さんを覚え、また、毎週ここを訪ねては手掛かりを求めているご父君・川村さんの思いを偲び、佇んで祈る他はありませんでした。

同じころ、東京の古い友人が既に3月中に始めた”Sixteen Fathers”の働き(福島から宮城にかけ、フィリピン女性=花嫁たちの家族を支援するため、リレー式に支援物資を車で運び届ける働き)を知り、岩手の支援を必要とするグループとの連絡を濱塚さん経由で取りつけ、陸前高田の窮状を知りました。及川忠人さんも同様の話だったので、教会としての支援活動を、暫くここで行う提案を役員会に諮りました。6月7日第1回の訪問で、菅原マリフェさん宅(自宅は流され、近くの本家に親戚3世帯が避難)に、ミネラルウォーターやオムツ等を届けました。

更に、お米や衣類、扇風機等の電気製品、ミルクや防虫剤・防臭剤・・・。事態の変化に伴い変わる需要を聞いては、教会の支援献金で購入する他、友人や姉、他教会から送ってもらい、毎週、届けてきました。6月後半は、更に気仙沼のグループにも届けるようになり、長い時は400kmをドライブしました。

実際に被災した方たちの話を聞くと、ただ見ただけとは違う情景が心に刻まれていきます。恐怖に怯え逃げ出した自分・・、いつも声をかけてくれた隣人の死・・、握っていたのに手を離し、流されていったあの人の顔・・。涙ながらに語られる言葉は、災害の恐ろしさを語るとともに、人の思いが自然の力に優って、そうした景色を蔽い、色づけていきます。災害の理不尽さと同時に、それでもなお、人の心の優しさ・哀しさが思いの底から紡ぎ出される時、そこに悲しみ・苦しみと共に、美しささえ感じてしまいます。

勿論、これからの歩みを考えると、まだまだ苦難の時は続き、簡単に解決はしないでしょう。大変さはむしろ、これからでありましょう。でも、そんな苦難に負けてしまわない人の強さと美しさも、同時に感じるのです。人がひとり(孤)ではなく、共に生きようとする時、其処には、足し算では終わらない何かが生まれてくる・・そんなことを、支援に携わっている多くの人たちは感じているのだろうと思います。

最後に、宇都宮の友人が最近、福島から避難している方々の支援イベントに参加した時に聞いた言葉を記して、このメモワールの最後とします。福島から宇都宮にきたあるご夫婦の言葉です。「私たちは、目の前の扉を自分で開けなければならないんです！今日、いろいろな救援物資を頂いたけど、頂いたってことは、いつか、お返しをしなければと思うんです。頂くだけではダメなんです・・・。何をお返しできるかわからないけど、たとえば、笑顔であいさつとか・・・。小さなことからでも、何かからスタートしなくては・・・。何かができるはず・・。私は負けたくないんです・・・」。

きっとこのご夫婦は、精一杯に頑張ってこられたのでしょ。その力みがあったのかも知れません。でも「目の前の扉を自分で開ける・・それは、他ならない自分なのだ・・！」という強い決意(それは人間としての決意でありましょう)が、本当に尊い言葉として語られています。この言葉は、支援する側・支援される側、どちらにも言えるのではないのでしょうか。私たち一人ひとり、この震災の後に開けなけ

ればならない扉が、目の前にある筈です。誰かが開けるのを待っているのは「ダメなんです…」という

ご夫婦の言葉は、私たち一人ひとりの言葉である筈です。



なぜ社会主義中国でキリスト教が急速に普及しているのか(その2)

川崎広人

【編集者脚注】

前号の『季刊うちまる』では、一昨年、生協の普及のために中国に渡り、現地の状況を見聞してきた川崎広人さんに中国のキリスト教についてレポートしていただきました。中国というと、共産党による一党独裁で、科学的社会主義を掲げていることもあって、キリスト教などの宗教に対しては不寛容というのが私たちの一般的なイメージです。しかし、意外なことに、その中国で、キリスト教が私たちの想像を超えるほどに広く根を下し、無視できないほどの勢力となっているというのが前回の川崎さんの報告でした。そこで、今回は、そのような私たちの素朴な疑問を念頭に置きながら、川崎さんご自身に、Q&A形式(想定問答)で続編をつづっていただくこととしました。

Q1 あなたは中国のキリスト教徒数を1500～3000万人と言いますが、本当なのですか。そうだとすると中国人留学生の中にクリスチャンが見当たらないのはなぜですか。

A: 信者数についての正確な統計はなく、1億5千万人という説もあるほどですが、おそらくは、前にお伝えした数字くらいかと思います。信者は、大都市には少なく、どちらかといえば農村部に定着しています。そのため、日本人が農村部のキリスト教に接する機会はほとんどなく、キリスト教の実情が知られてこなかったように思われます。山東省兗城(ウーチャン)では50万人の人口の10%の5万人がクリスチャンですが、決して特別ではありません。キリスト教研究の調査報告書を読みましたが、沿岸部の農村部では、さらに布教が進み、兗城よりクリスチャンが多い所も少なくないのです。留学生の中で信者が多くないのは、彼らの大部分が都市部出身者だからです。ただ、3000万人と言っても人口の2、5%であり、日本は1%ですから、比率からすればさほど多いというわけではないかもしれません。

Q2 中国で見た教会の姿はどのようなものでしたか

A: 私が見聞した中国の教会には、四つのタイプ

がありました。一つのタイプは、青島のドイツ植民地時代に造られた丘の上の有名な教会でした。大きなスクリーンを備え、700人くらいが参加できる大きな教会でしたが、そこでは、多くのボランティアが運営に参加していました。日曜日は、数回の礼拝が行われますので、外には次の礼拝を待つ人たちが数百人待機していました。二つ目のタイプは、大学から2キロほど離れた住宅と中小企業地帯にある教会で、見た目は普通の四角の民家です。普通の住宅を改造した教会には、本部の支援により、机つき椅子が180台と音響設備、電子オルガンが備えられていました。日曜日は超満員になり、舞台では20人くらいの若者が合唱をリードしていました。出席者は、いずれも農村から来た底辺労働者です。月収が800元(12000円、会社の寮住まい)程度で送りもしていますから、自分自身の小遣いは少なく、教会が癒しと遊びの場となっていました。礼拝後も若者たちが何をするでもなく、立ってダベリングしている姿が目につきました。献金箱が入り口においてあり、これで一人の牧師の生活を養い、一方、副牧師は兼業によって生計を維持していました。トイレが汚いことが印象的でした。私は、主としてこの教会に通っていました。三つ目のタイプが前回報告した農村の教会です。四つ目は、聞いた話になりますが、北京の中心部の教会です。日本の都市部の教会のように洗練され、立派な建物があり、整然としていたとのこと。大多数の教会は2番目と3番目のようです。

Q3 社会主義国でキリスト教が普及するはずはありません。あなたの報告は偏っているのではないですか。

A: 実は、30年ほど前、私は、インドネシアで日本の協同組合運動の教訓を伝えることを夢見ていました。しかし、インドネシア政府の応諾が得られず、訪問先を中国に変更せざるを得なくなってしまいました。その結果、30年間も学んだインドネシア語は水泡に帰し、60歳になってから中国語を学ぶことになりました。私自身、中国語の勉強を始め

るまでは中国に対する偏見がとて強く、その後は、偏見を一つ一つ克服しなければなりません。

中国がキリスト教と出会ったのは、西暦 635 年、シリアの宣教師が長安で唐の王から許可を受け宣教したのが最初と言われています。その後、16 世紀には、かなりの西洋の宣教師が伝道していますので、日本よりもはるかに長い歴史があることとなります。キリスト教は、一面、西洋の文化の導入に貢献しましたが、他方、西洋による中国の植民地支配に強く利用され、中国国内でもキリスト教徒の主流は常に外国植民地支配側についてきました。しかし、その一方、革命運動の過程では、少数派のキリスト教徒が革命側につき、クリスチャン将軍もいたということです。その人々の理念は、国を愛し、神を愛することであり、外国の侵略に対し断固として戦うということであったようです。その後、キリスト教主流派は、外国から経済的援助も受けながら国民党軍につき、やがて台湾に逃亡しましたが、本国に残った 70 万人の少数派は、1949 年、中華人民共和国の樹立に加わり、その後、現在まで根を下し続け、その結果が 1500 万人～3000 万人と言われているのです。

Q4 どうしてそれほどまでにキリスト教が急速に普及したのですか

A: 僅か 60 年間にこれほど急速にクリスチャンが増えたとすれば、中国社会が信仰を受け入れやすい状況だと考えたくになります。しかし、ご承知のとおり、中国は、社会主義国で、最大党の共産党は「党員は宗教をもってはならない。」と指導をしていますし、事実、1965 年から 1975 年までの文化大革命のときには、キリスト教が迫害される歴史もありました。幾人かの牧師に、「日本はキリスト教徒が 100 万人だけですが、なぜ中国はそんなに多いのですか。」と尋ねてみましたが、現在の状況を当然だと見ている彼らからは、期待するような答が得られませんでした。ただ、いくつかの研究論文の中では、革命後、地域でどのようにして宣教が進んだかということについて具体的な報告もなされています。また現代社会においてキリスト教が貢献していることも論証されています。国が広く、人口も多く、大学も多い分、キリスト教の研究も多数あるのです。帰国後、『いのちのことば』2010 年 11 号を読みながら、中国のキリスト教事情はまだ知られていないと痛感しましたが、中国では、中国語のインターネット「百度」で「基督教」を検索すると、無数の記事にヒットすることをお伝えしておきたいと思

そこで、本題に入りますが、なぜ宣教が進んでいるのかについて私見を述べてみたいと思います。第一は、キリスト教徒が少数派であっても、高い倫理観をもち、地域で尊敬される人々であったこと。そのため、危機的状況に陥っても周囲の人々に支えられてきました。第二は、キリスト教徒が教育熱心であること。農村の困難な経済状況の中にあっても、高校、大学に進学する子弟が少なくないほか、日曜日の礼拝がおのずと教育の場となっていたことも大きかったと思われます。母親は子供を連れて教会に来ますから、一緒に牧師の説教を聞きます。牧師は地域で優れた人だと見られています。親子で学ぶ教育の場ほど素晴らしい教育の場はないでしょう。牧師もその説教のために絶えず準備しています。第三は、キリスト教が社会主義を進める同志と見られ、国家に支援されている面もあることです。地方議会では、キリスト教代表としていくつかの議席を占めているほか、農村教会の土地は国から無料で借りているという事実もあります。建築費用については分かりませんが、メンテナンスは教会でやっていたようです。牧師の給与はなく、農業と兼業でした。都市部では献金で支えられていました。国家にとっては、キリスト教を迫害する理由も全くないし、逆に地域においては、自治体が教会に慈善組織としての役割を積極的に要請している姿を見ました。第四は、中国が過去 30 年以上も 10% 近い高度経済成長を続けており、国民の中で「拝金主義」が強く見られることと関連しています。これは本来、社会主義の理念には反することですが、一部の金持ちが目立てば、羨望として拝金思想が出てくるのは当然かもしれません。私と直接、交流のあった学生の中には顕著な拝金思想は見えなかったのですが、一般社会では根強いものを感じました。例えば、学生は学内の大学寮に住み、学内食堂、売店、床屋など一切の生活を学内の設備で賄うことができ、その意味で、学内は、一つの総合的な商店街をなしていました。つぶさに観察していると、これらの経営は正に資本主義以外の何ものでもありませんでした。一方、農村では、良い意味での伝統的な秩序が高度成長によって壊されている状況があり、そうした中で、キリスト教の理念が大きな心の癒しと励みになっている面がありました。文化大革命で伝統的な倫理観が一部壊された状況の中で、キリスト教の倫理観が教育的にも政治的にも重要視される必然性があったように思われます。第五は、教会が地域を代表し、地域とともに活動している点にあります。先に、報告したとおり、冬休み中、学生による 8 つの農村ボラン

テア活動のうち3つのチームがキリスト教会と一緒に活動していました。この活動は大学と地方政府が事前に打ち合わせをして行っているものですが、教会も社会と政府から信任され代表として参加し

ていたのです。以上のような点が、中国のキリスト教を大きく飛躍させる背景にあったものと思われる。以上

シリーズ 『礼拝出席者の素顔』 ～田中ひろこさんに聞く～



記者： きょうは、季刊うちまるの企画にご協力いただきありがとうございます。よろしくお願いいたします。

田中： こちらこそよろしくお願いいたします。

記者： ご承知のとおり、今年度、内丸教会では、しばらく途絶えていた「季刊うちまる」を復刊することになったのですが、寄稿が可能な方をお願いしているだけでは、いずれ短期間でネタ切れになってしまうことが目に見えていますので、むしろ、いろいろな方にインタビューして、意外と知られているようで知られていない教会関係者の素顔をお伝えする企画を考えてみました。もちろん、プライバシーにかかわることや他の出席者に伝えたくないこともおありでしょうから、その点については十分ご要望をうかがい、意に沿うようにしたいと思います。

田中： わかりました。

記者： 田中さんは、現在では、すっかり、内丸教会にとって欠かせないメンバーとなられていますが、最初にいらしたのはいつごろのことになりますか。

田中： そうですね。あれは、2009年の9月頃で、内丸教会がまだ無牧のころだったと思います。盛岡に就職し、一人暮らしをしていた息子が体調を崩したので、生活を支援するために福岡市から盛岡市に移ってきたのです。

記者： ずいぶん遠くからおいでになったのですね。

田中： 盛岡は、郷里と遠く離れた地で、知人もなく、さびしい思いをしていたことから、かつてかわりのあった教会を訪ねてみようと思ったの

です。

記者： それが内丸教会だったのはどのようなきっかけですか。

田中： 息子がインターネットで調べてくれて、内丸教会を訪ねるのに便利だとわかったからです。でも、当初は、無牧であったためか、電話も通じなくて戸惑っていました。でも、思い切って9月末の日曜日、本当に何かに導かれるように出席してみました。

記者： その時期は、無牧で、説教も隠退された教師に交互にお願いしておりましたし、後任の牧師も定まらないという最も不安定な時期で、はじめて出席される方にとっては、失望を与えかねない状況だったと思うのですが、そのような内丸教会の礼拝に続けておいでになるようになったのはどうしてだったのですか。かなり変な質問かもしれませんが。

田中： はじめて出会った中条先生やその奥様が親身に私の話に耳を傾け相談に乗ってくださったこともあります。それとともに、教会員の方々が無牧の状態であるにもかかわらず、真剣に教会の運営に当たったり、後任牧師を得るために努力されたりしている様子に感銘を受けたことがあったように思います。また、何人の方が初めての私に声をかけ暖かく迎え入れてくださったからだと思います。

記者： それは私としてもうれしく思います。ところで、田中さんにとって、最初のキリスト教、もしくは教会との出会いというのはどのようなものだったのですか。

田中： そうですね。私がキリスト教と出会ったのは、高校時代のことです。私は、文学好きの暗い高校生でしたので、様々な作家の小説などを読み漁っていましたが、大好きな福永武彦の『草の花』という作品の中に記されていたペテロの言葉に深い感銘を受けたのです。「人は皆、草のようで、その華やかさはすべて草の花のようだ。しかし、主の言葉は永遠に変わることがない。」という箇所です。それもひとつの契機となって、広島の大蔵大学に入ってから教会に通うようになったのです。その当時通っていた教会の牧師さんは、とても立派で尊敬できる方でしたし、教会生活も青年会が活発であったり、しばしば信徒宅を訪問したりして居心地のよいものでした。そのような雰囲気の中で、私は、大学1年のクリスマスに受洗したのです。

記者： その後、ずっと教会生活を続けてこられたのでしょうか。

田中： いいえ。残念ながらそうではないのです。あの時代は、政治的に熱い時代でした。たまたま、私の下宿先は被爆者の家でしたし、学友やその他の人々と政治や宗教について真剣に議論を重ねていました。そうした中で、次第に、キリスト教や宗教の限界ということを考えるようになり、徐々にキリスト教から遠ざかることになってしまったのです。

記者： 教会から遠ざかったわけですね。でも、そのような田中さんをキリスト教にとどめたのはどのようなものだったのでしょうか。

田中： たしかに、その後、長い間、私は教会の礼拝には出席しませんでした。でも、さきほど、申し上げたように学生時代であった牧師さんがとてもすばらしい方で、その牧師さんからプレゼントしていただいた聖書を大切に手元に置き、折に触れて読み、自分勝手に解釈しながらも、ずっと心のよりどころにしていました。

記者： ああ、そうだったのですか。ところで、田中さんは、大学卒業後はどのようなお仕事をされ

ていたのですか。

田中： 私は、自分自身がもともと病弱だったこともあって、ずっと障害児のために働きたいと思っていました。それで学生時代も障害児教育を専攻し、障害児施設にボランティアに出かけるという生活を送っていました。本当に、いろいろあった学生生活でしたが、卒業後は、一応、教員となって障害児の教育に従事してきました。

記者： ご自身の病弱に照らし合わせて、強い願いを持って教員をこころざし、それを続けてこられたのですね。

田中： いいえ、私は、十分なことができたとは全く思っておりませんし、むしろ、後悔することがいっぱいです。そのこともあって実は、教員時代のことなどはあまり皆さんに語りたくはないのです。

記者： いろいろと複雑な思いもかかえながら、この盛岡に移ってこられたわけですね。しばらく、私たちと一緒に礼拝を守っていて、この内丸教会はいかがですか。

田中： 内丸教会は、私にとって、しばらく離れていた教会と再び会う機会を与えてくれた教会だと感じています。日々、悩み、生きかっていたときに与えられた場所です。とても居心地がよくて心から感謝しています。

記者： 田中さんというと、表には立つことなく、でもずっと以前から教会にいらしていたかのように礼拝に出席された方々のためにお茶をサービスしてくださったり、クリスマス行事に際しては、さりげなく飾りを作ったり、案内状に宛名書きをしてくださったりという地味な貢献をしてくださっている方というイメージがあるのですが。

田中： そうですね。私は、本当に表に立つことはあまり好きではないのです。でも、教会でお世話になっているという気持ちもあり、何かできることがあればさせていただきたいと考えています。

人前で語ることも得意ではないので、そうっと下支えのようなことができると願っています。

記者： クリスマスの飾りつけなどではとても素敵な作品を作られますが、どこで技をみがいたのでしょうか。

田中： それは、障害児教育をやる中でいつもやっていたことですが、自分では不器用だと感じています。でも、これからもお役に立てることがあれば、させていただきたいと思っています。

記者： 最後になりますが、聖書の中で、特にお好きな言葉などはありますか。

田中： 聖書を読むたびに感銘した箇所にはしばしば赤い線を引いたりしています。たくさんあって、

急に聞かれても答えにくいのですが、本年度、教会がかかっている申命記の聖句なども好きな言葉です。

記者： 本日は、どうもありがとうございました。日頃の茶話会の話ではわからなかった田中さんの歩みの一端をうかがい知ることができ、うれしく思います。盛岡での生活がいつごろまでになるかわかりませんが、今後ともよろしく願います。

田中： こちらこそよろしく願います。

2011年6月26日

【インタビュアー 魚住英昭】

2011年度 第66回 日本基督教団 奥羽教区定期総会

2011年5月24日(火)～25日(水)、キリスト教センターで奥羽教区定期総会が開催された。内丸教会からは、中原牧師、中条先生、神谷役員が出席した。参加は、教区58教会、関係団体等からあり、正議員114名中100名の出席であった。

荒木富益牧師の按手受領願いが審議、承認され、按手札が施行された。また2010年度に亡くなられた信徒の方61名の追悼礼拝が施行された。

日本基督教団から総会議長の石橋氏の挨拶が内藤総幹事によって読み上げられた。その中で、伝道の教会を示唆しながら、50年後に「教団200周年」が祝えるかという言葉が述べられ、ショックを与えた。地域の中でそれぞれの教会が、悩みを持つ信者の心をとらえようとしている状況を認識することなく、教団という組織の維持に汲々としている状況を如実に反映している言葉ではなかったのか。この挨拶に対する質疑の中で、被災地の教会から、教団の被災地に対する対応の在り方に批判が出されていた。

奥羽教区議長の2010年度の教区活動の総括では、教区の現住陪餐会員数は2003年度2038名が2009年度は1875名と2000名台を切り、礼拝出席者、2003年1460名から2009年度1375名に減少、これが、教区の財政に反映している状況が示された。この教区財政問題に関しては、経常費の切り詰め、開拓伝道資金より90万の繰入で、2011年度の

予算は2551万円とされた。さらに、今年度の次期長期宣教基本方針の検討と合わせて、教区機構の改革を進めることが述べられた。

教団関係の報告は、ひとつは、「沖縄教区」との合同のとらえなおしに関してであるが、37総会には上程されず、前進が見られないこと。ひとつは、北村牧師に対する戒規問題は、総会で討議することなく、戒規に関する議案は、破棄され、教団の戒規重視という、建前が尊重された総会運営が行われたということ。ひとつは、教区活動連帯金という、いわば教団による地方教区に対する補助金のようなものが、「東京教区」の拠出保留により、本来なら配分されるべき補助金約500万の半分しか教区に送られてこないという異常事態が何年か続き、このたびの東日本大震災ゆえに内藤幸幹事のとりなしという、これまた異常手段により保留が解除され、数年分の保留分が送付されたということである。教区の宣教に関しては、「社会問題セミナー」の特に「性差別問題小委員会」におけるロールプレイにより教会内に潜む無意識の差別の存在の指摘は、的を得た指摘ではないかと思われる。今回の会議の中で、提案された議案として「原子力発電、核燃料サイクルの中止と自然エネルギーへの転換を求める決議」が提出され、満場一致で採択された。

(書記 神谷一夫)

2011年度 第1回 岩手地区会報告

日時:2011年4月29日(10時30分～15時45分)

会場:水沢教会

地区18教会中15教会の牧師が出席し、信徒も含めて25名の出席があった。三陸沿岸地区の新生釜石、宮古教会の牧師さんは、震災後、一日の休養も取らず、教会、地区の支援活動を行はれておられたとのこと。

各教会からの報告や、教区の震災関連の報告のあと、地区役員の選挙があり、地区長は北上教会の小

林牧師、書記は水沢教会の山下牧師、会計は花巻教会の山元牧師が選出された。

地区の2010年度の諸活動の報告の後、2011年度の地区活動計画が検討され、予定していた第8回岩手地区修養会(7月27日～29日、大船渡の県立福祉の里センター)は、震災の影響により中止となる。その他、従前の地区活動は縮小し、被災教会支援に余力を注ぐことになった。

(書記 神谷一夫)

お誕生日おめでとう! (7月～9月までにお誕生日を迎える方々)

- 7月にお誕生日を迎えるかたがたです。おめでとうございます。
14日)伊藤信彦先生、18日)井上優子さん、
20日)荒木富益さん、26日)佐藤和行さん、
27日)野坂貞子さん、中屋洋子さん
- 8月にお誕生日を迎えるかたがたです。おめでとうございます。
8日)熊谷昌子さん、13日)成田鉄雄さん、
19日)千田桃子さん、21日)千田睦美さん
- 9月にお誕生日を迎えるかたがたです。おめでとうございます。
12日)祝田奈緒子さん、16日)久保 毬さん、
30日)田山幸宙さん



7～9月の行事

- 7月18日(月) 役員研修会、牧師館 10時～16時
- 7月20日(木) 家庭集会 村上宅 11時～
- 7月27日～29日 地区修養会 中止
- 8月5日(金) 北上・盛岡合同朝拝会 山形村チャペル
- 8月22日(月) 13時—23日(火) 「教会と国家セミナー」 ユートランド姫神
- 8月27日(土) 内丸教会修養会 「中期計画について」 10時～16時
- 9月23日(金) 9時半～15時 岩手地区信徒大会
花巻教会 証 魚住英昭



震災支援献金についての報告

会計 山口貴伸

東日本大震災により、東北の沿岸地域は大きな被害を受けました。内丸教会においても被災地の支援のため、義援金を支出する必要があるとの認識から、3月27日の臨時役員会において震災支援基金を開設し、献金、支援物資の購入、搬送のための費用に充てることにしました。

基金の原資としては、2010年度の剰余金から50万円を基金に振り向けるほか、100万円を目標に教会員に献金を募ることとしました。

8月15日現在の基金の収入は1,838,491円、剰余金からの50万円の繰越金の他、20名の方が1,338,000円の献金をお捧げ下さいました。

支出の方は1,338,147円、支援活動については支援物資の収集、搬送についてYMCA、青山学院高等部同窓会等の協力を得ながら4月18日に新生釜石教会を訪問、5月9日遠野教会三浦牧師と大槌町のおさなご保育園、16日三浦牧師と釜石訪問、31日に大船渡教会の牧師館の支援のため、テレビ、掃除機を購入し届けたほか、6月7日、13日、20日、27日に陸前高田市、20日、27日に気仙沼市を訪問、当地のフィリピン人家庭などに、洗剤、防虫防臭剤、ハエ取り紙などの日用品、野菜ジュース、ココナツミルクなど食料品などを購入し届けています。

収入		8/15 現在 (円)	
名 目	金 額	内 訳	
献 金	1,338,000	中原眞澄、中屋重正、八重樫幸蔵、田中ひろこ 魚住恵、魚住英昭、中井恵美、今泉弘子、神谷一夫、 佐藤倫子、番町教会 藤森健（まぶね教会）、青山学院高等部同窓会 湊明子、山口貴伸、田村育代、及川忠人・頼子 中条和哉、千葉洋子、村上章子、赤松貴美	
2011年度からの繰越金	500,000		
会堂改修献金残金	491	利息等	
合 計	1,838,491		

支出			
名 目	金 額	内 訳	
支援物資購入	,483,147	上記の他扇風機、お米20袋、ペットボトル等	
奥羽教区へ献金	500,000		
カナンの園へ献金	300,000		
交通費	55,000	中原牧師ガソリン代等	
合 計	1,338,147		

(収入) 1,838,491 - (支出) 1,338,147 = (8/15 現在残金) 500,344 (円)

あとがき

皆様のご協力のもとに、季刊うちまる復刻2号が発刊の運びとなりました。岩手は、このところ、震災後の混乱に加えて凄まじい猛暑に見舞われ、例年になく過酷な季節となりました。仮設住宅等で生活する被災住民の方々にとってはなおさらのことであったと思います。復興が緒に就いたとはいえ、三陸は、まだ、先が見えない状態で、多くの被災者が不安や怒り、絶望の感情に包まれています。ただ、そうした中でもひとりひとりが地域コミュニティーや日本全国、世界の絆を実感する中で一縷（いちる）の希望を見出そうとしています。政策や財政的な裏付けもさることながら、アウシュビッツから生還したフランクルが述べているように、まずは人間としての想像力やユーモアが再生の礎石となるのかもしれませんが。この間、中原牧師をはじめ、多くの教会員や教会関係者も被災地を訪ねたり、物資の提供や義捐金等により支援の輪に加わったりしてきましたが、それ以上に全国の諸教会、諸団体が内丸教会や沿岸部の諸教会を通じて、大きな支援を寄せてくださいました。それら多くの人々、及びすべての人々の間に立たれる主イエス・キリストに深い感謝をこめて、季刊うちまる2号をお届けすることとします。

2011.9.4 魚住

「季報うちまる」編集委員：魚住英昭、神谷一夫
〒020-0021 盛岡市中央通一丁目6-44
TEL(622)6688 FAX(622)2565
日本基督教団 内丸教会 牧師 中原真澄